

社寺建築及臺灣檜材の安價提供
設計監督

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候
追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不
充分なる檜材は干割狂ひ等の缺陷多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地
(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社寺工務所

(電話青山六〇二八番)

神奈川縣 鶴見町

社寺工務所鶴見支所

福岡市外堅箱町馬出松原

社寺工務所福岡支所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社寺工務所大阪支所

(電話西三三二四番)

- 臺灣檜材の六大大特徴
- 一、耐久防腐
 - 二、蟻害絶無
 - 三、香氣清楚
 - 四、木質堅緻
 - 五、理整然木
 - 六、木高稚包

一冊	金 貳拾錢	送料五厘
半冊	金 壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ年	金 貳圓貳拾錢	送料共
一ヶ月	金 貳圓貳拾錢	送料共
一ヶ日	金 貳圓貳拾錢	送料共
一ヶ時	金 貳圓貳拾錢	送料共

表紙一頁	金 貳拾
一頁	金 拾五
半頁	金 九
四分一頁	金 五
五分一頁	金 五
五分一頁	金 五
五分一頁	金 五
五分一頁	金 五
五分一頁	金 五
五分一頁	金 五

昭和四年五月廿四日印刷
昭和四年六月一日發行
行 (第四百十一號)

不許複製

編輯兼發行人 小林順義
印刷人 鈴木日雄
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川四百八十二番地 電話高輪六〇二四番

發行所 統一發行所
編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ
東京府荏原郡品川町南品川四百八十二番地 電話高輪五〇七一番

目次

感憤興起……………本多日生

祖書五大部の綜合觀(其二)……………本多日生

天風三萬里紀行(其一)……………小林日種

記事……………

○知法思國會第七回懇談會 ○同會教化大講演會 ○野口上人海外巡錫

各地教報……………



名古屋基督教會館ニ於ケル
自慶會紀念大會



(記事参照)

感憤興起

大僧正 本多日生

吾々人間は善き事に關して志を立て、それを實現する爲に努力を續けて行くのが、善き生活であると思ふ。その善き事に感じて志を立て、これを實現すべく努力するといふ意味合を、簡單に言へば感憤興起するといふことになるのである。

この感憤興起といふ言葉は世間でも盛んに用ひるのであるが、佛教の方で信心をするといふ意味は、感憤興起するといふやうな事とはまるで違つた事のやうに、今まで多く響いて居る。即ち佛教の方では、信仰をすれば有難いといつて非常に喜んで、それでモウ落着いて滅入つてしまふものだといふやうな風に、考へられて居るのであるけれども、自分が學んだ佛教に依れば決してさうではない、佛教の信心も

大事な意味は感憤興起するといふことに在ると思ふのである。それは語は多少違つて使つてあるけれども、すべてのお經の終りには、釋尊の説法を聞いた聽衆が「歡喜奉行す」といふことが書いてある、喜んでその事を行ふといふ、喜ぶといふのと感憤するといふ事は違ふやうに見えるけれども、これは結局違はないものである。唯だ順序が少し前後になるので、宗教の方は喜んでそれから志を立てるのであるし、世間の方は志を立て、その中に喜びの心を加へて努力して行くといふ風になつて居るのである。

『論語』の中に孔子が自分の事を自分で言ひ現はして居る大事な言葉がある、それは

「憤を發して食を忘れ、樂んで以て憂を忘れ、

老の將に至らんとするを知らず」

といふ事である。その「憤」を發するといふことは、腹を立てることではないのである、悪い者に對したならば腹を立てるやうな意味にも見えるけれども、善き事に對して發憤するといふのは腹を立てるのではない、自分の心にムク／＼とその事が考へられて、どうしてもそれを實現しなければ已まぬといふ風に、その事柄を大切に考へ、その事柄を實行に移さうとする精神の躍動して居ることを「憤」といふのである。決して腹を立てるといふやうな意味ではない、チツとして居られないといふことである。本當に感心をすればそれがチツとして居れない働さに移つて来る、その働いて行く所に楽しんで憂を忘れるといつて、如何なる困難な仕事にぶつかつてもその志に導かれるが故に、苦勞を苦勞と思はない精神になる。さうしてだん／＼年を取れば氣が説けたやうな事になるものであるけれども、本當の發憤して

て行くやうになつて居るけれども、これは頽廢した結果である。釋尊の化導を受けた人達はその喜びの心に感憤して、その喜びの感憤を以て直に志を立て、その志に就てそれを實現すべく努力して行つたのである。即ち法華經の法師品に、

「是の人は大信力及び志願力、諸の善根力あらん」

とある、その「大信力」が「楽しんで以て憂を忘る」といふことである、「志願力」が「憤」を發して食を忘る」といふことである「諸の善根力」が「老の爲に至らんとするを知らず」で、何處までもそれをやり續けて行くといふことであるから、法華經にあるさういふ意味と、孔子が自分の事を自分で言ひ現はした事とが符節を合せるやうになつて居るといふのは、達人の上に於てはその考が變らないものだといふ事を深く感じて居るのであるが、今感憤興起といふ事を言ふのもやはりさういふ意味で、儒教を

居る人は年を老つても少しもそれは變らないのであつて、老の爲に至らんとするを知らずで、年老り居るといふことを忘れて一生懸命その事に働き續ける。その意味は孔子がやはり「論語」に言うて居るが、

「任重くして道遠し、仁以て己が任と爲す、豈重からずや、死して而して後已む豈遠からずや」仁といふ大きな道徳を行ふのを自分の任務と考へて居る、それはなかく實現されぬ事だけれども、どうしてもこれを實現せんければ已まぬといふ決心の爲に、無論懸命である「死して而して後已む」息の通はん際はやつて／＼やり續けるといふ事を考へて居る、から任重くして道遠し、故に年を考つても氣は脱けぬといふことを申して居るのである。

この發憤興起して居る意味合は、やはり佛敎の歡喜奉行といふ事がそれなんであつて、近頃の誤り傳へて居る佛敎の信仰は、有難いといふ事で氣が脱け

學んだ人は「任重くして道遠し」といふ非常な責任感を以つて奮闘を續けるのに、佛敎を信する者は唯だ利己的に、安心したらモウそれで宜しい、何にも心配がないといふやうな、非常な消極的な力の無いもの、やうに解釋をしたといふことは、日本佛敎の墮落である。

お經の上に於てはさういふ事はない、ごのお經を讀んで見ても、釋尊の説法を聞いたが爲に必ず發憤興起してそれだけの活動に就て居るものである。阿含と雖もすべてサウである、釋尊の一回の説教を聞いて有難いと思つた者が、その儘安心して眠つてしまつたといふやうな事は何處にもない、感憤すれば必ず佛の敎に導かれたる善き行爲を勵んで行く意味になつて居るのである。そこが宗教の尊い所で、安心するといふ事も良いことだけれども、安心した儘で眠つてしまふのならば、安心をむやみに與へてもつまらない。何も心配するな、どうせ世の中はこん

なものだから……と言つて諦めをさせて實際に活動くといふ力を去勢してしまつては、人生の爲には何等益する所はないのである。所が日本人の今まで多く佛教に集まるのは年老つたやうな人であつたからお爺さんでもお婆さんでも、何でも責任の無いやうな事を言はれて「モウ阿彌陀様にお委せしたから何にも心配はない、安心して歸つて寝なさい」と言うて貰へば安心して歸るといふ状態である、これが如何に本人の不爲になり、國家の不爲になつて行くかといふ事を考へると、實に間違つた教化方法であることがわかるのである。

人間は如何に年を老つても發憤興起して行く所に價值がある。我が宗の開祖日什正師は、既に比叡山の學頭を勤むること二十餘年、所謂功成り名遂げて故郷會津に隱栖をせられたのであるけれども、日蓮聖人の開目鈔、如説修行鈔の二鈔を見られて大いに發憤興起して、再び草鞋を穿いて六十八歳の年よ

り愈々日蓮聖人の教の爲に奮闘を續けて、八十歳まで働かれたといふ譯である。六十八歳といへばモウ良いお爺さんである、それから草鞋を穿いて新しき活動に就かうといふ、そこがやはり發憤興起する所で尊い事だと思ふ。

日蓮聖人の上につて考へても、日蓮聖人はどこ迄も發憤興起したる精神を喪はない、身延の山に入られたのは表面は隱栖といふけれども、奮勃たる精神といふものは少しも渝らない、最後池上に於て最終の説教をせられる時でも、意氣昂天の力といふものは少しも脱けて居ない。であるから六老僧の中の日頂上人が書かれた文章が、舊の板本の御遺文の録内の中に紛れ込んで居るが、それを讀んで見ると、先師日蓮聖人は憤を懷いて死なれたのである、所謂發憤したるそのムク／＼した氣分をその儘持つて、その志を果さずして入滅になつたものである。譬へて見れば釜底にある大きな木が、良い棟梁に見出

されずに今なほ谷間に埋もれて居るやうなものである、夜光の明珠函を出でず、立派な珠であるけれども函の内に入れた儘になつて居つて光を放たないといふ事が書いてある。そこが日蓮門下の忘れてならぬ所である、その大聖人の發憤せられて居る氣分を承繼いで、どうぞしてそれを實現したいといふ所に力があるので、即ち心ある人はその志を繼いで大いに奮闘するのである。日什正師の如きも起つて働かれたのはそれが爲であつた、公家に三度、武家に三度の奏聞といふことになつたのも、その當時に於ての活動は奏聞といふことが非常な大きな運動であつた、懸命で天下を諒曉してこの大法光頭の爲に盡さうといふ、不惜身命の大活動である。それは即ち先師憤を懷いて遷化せられて居るといふ事から來て居ると思ふ。

さういふ氣分が非常に大事であつて、不肖ながら吾々はその志の萬一を懷いて今なほ奮闘して居る

次第であるが、人間は或る事柄に觸れると非常な感激があり、そこに力を生ずるのである。それで卑近な事であるけれども一つの實例を御紹介して置きたい。斯ういふやうな意味合を信者が皆よく考へないと、唯だ有難い／＼といつて力の抜けたやうな事を喜ぶといふ風になる、さういふ情弱の性癖といふものを根柢から改善しなければ、將來佛教といふものは役に立たないものになつて行くと思ふのである。

これは三月十九日(昭和四年)の大阪朝日新聞に報道せられて居る事であるが、雲州松江市の南田町といふ所に曉庵といふ養鶏場を經營して居る津田盛次郎といふ三十七歳になる男の一身に關する話であつて、その寫真も出て居る。この男は大正七年の頃には松江市の或る製鋼所に勤めて居つた一職工であつたが不幸にして機械に兩腕を挟まれて二本の腕が切斷されてしまつた、随分激しい負傷であるから一命にも及びかけたのであるけれども、殆ど奇蹟的に命だけ

は助かつた。併しまだ若いので何の貯蓄もなし、少しの慰藉料は貰つたけれどもそれも無くなつてしまつて、暗澹たる日を送つて居つた。丁度徴兵適齡の爲に検査に呼出されて聯隊副官の前に立つた、ポツンと兩腕のない人間が立つたので、副官も驚いたけれども、その弱り果てたやうな顔を見て氣の毒に思つて、これを慰め且つ激勵して、人間は腕が無いからといつてナニニそんなに力を落すことはない、お前は鶏を一びき飼うて見よと言つた。それから一羽の鶏を他所から貰ひ受けてそれを世話をした、手が無いものであるから足で餌を調合したりしてやつて居つた。或る日ツクノ、鶏を見て居ると鶏は脚が二本で口が一つ、腕は無い、俺は人間であつて腕が無い、俺は人間であつて腕が無いからといつてクヨクヨして居るけれども、鶏を見ると脚と口だけで嬉々としてやつて居る、ナニニ人間が鶏に負けてたまるものかといふ事を非常に感じた。それか

ら何でも足でやることを稽古をして、餌の調合から一切を脚でやつて、時には足の指から血が出るやうな事もあつたさうであるけれども、だん／＼蒸練して參つて、遂に今では産卵鶏を三百羽ほど養ひ、雛を千三百羽も所有して居る養鶏家となつた。そのみではなく自分で非常に苦心して養鶏の秘訣を得たものであるから、その事柄を口にペンを啣へて書いて、その原稿を雑誌に載せて貰ひ、且つ禮を貰ふことが出来る位になつた。又俳句がチョツと出来るので、そんな事で心を慰めて居つたが、非常に辛抱のいい男だといふ評判になつて、或る女が大いに同情してこの人の妻になつて仕事を手傳ふことになつた。それで今日では女房もあり錢もあり、名譽もあり、非常に經濟の上にも豊裕になつてニコ／＼として暮して居るといふことが書いてある。寫真を見ると兩方の腕がスボンと無いから可笑しなものであるが、併ながら手が二本無くても感激を以て志を立て

てれば、それから後に經濟も立ち、初めは一羽の鶏を飼つて餌を買ふ錢が無かつたと言つて居るが、それが三百羽の鶏と千三百羽の雛を飼ひ、女房を得、名譽を得てニコ／＼暮すやうになつた、これは一つの感憤興起したる事から來て居るのである。これはマア自分一人の生活の事で、世間では斯ういふのを非常なえらい事に考へるけれども、孔子が發憤興起したといふやうな、天下國家の爲に起つたといふやうな事とは比較にならぬ、唯だ一身一家の生計であるけれども、併し兎に角兩腕の無い男が鶏を見て感心した譯である。孔子はあゝいふ偉大な人物になつたけれども、やはり川の水を見て感心した、滾々として晝夜を舍てず、川へ行つて見ると夜見ても晝見ても、何時でも水は流れて居る、我も志を立てゝやる以上は、夜も晝も間斷なく貫き徹さなければならぬといふ事を、川の水に就て感激をしてさうして彼は偉くなつたのである。何でもない

事のやうだけれども、深く物に感ずればそれで偉くなる譯である。傳教大師があれ程の高僧となつて、二十三歳で南都六宗の百十四人の學匠を説破する位の人物になつたのも、或る時川舟を見て居つた、川舟といふものは引上げて行く時分にはなか／＼骨が折れる、船頭が横着をしてそれを繋ぐすに船の中に入つてテツとして居つたならば、ひとり下に下の方へと流れて行つてしまふ、人間が志を立てゝ物事をやるには、船を川上に引上げるやうな努力を加へなければいかぬ、テツとして居ると思つたら寝て居る間に船は自然々々に川下に下つてしまふといふ事に就て非常に志を策勵して、その結果偉い人になつた。人間の感ずる事といふものは、サウ何も面倒な事ではない、簡単な事でも深く／＼感激すればそれで偉い人が出来る譯ナンである。日蓮聖人はいろ／＼感じをお持ちになつて居るけれども、最も聖人の精神を支配して居る事は、立正

安國論に現はれて居るところの

「予少量たりと雖も、忝くも大乘を學す、耆闍跋尾に附して萬里を渡り、碧蘿松頭に懸りて千尋を延ぶ、弟子一佛の子と生れて諸經の王に事ふ何ぞ佛法の衰微を見て心情の哀情を起さざらんや」

といふことである。自分は幸に大乘の佛教を學んだ、丁度蠅そのものは小さな物で大して馳ける力はなくとも、千里を走る馬の尻尾にとまつて居れば千里の遠きに達することが出来る、蠅は自から高い所に上ることは出来ねけれども、松の樹にからんで行けば高い所まで達する。日蓮は言ふに甲斐なき者なりとも、この佛の御教に絶つて進み行かならば、千里の道も行ける、高きにも昇ることが出来る、こんな有難い事はないといふ、佛および佛の教に絶つた氣分を非常に感激せられて、弟子一佛の子と生れて諸經の王に事ふ、日蓮は幸に本佛釋尊の愛子と

けれども、山の中などでバーンとやつたら、モウ行く事も還る事も出来ない、雨でも降つて来たりしたならば随分困るものである。今日の日本の佛教は丁度自動車が出ない、日は暮れる、腹は減るといふやうな有様のものではないか。眞の佛法が活躍したならば決してこんな譯のものではない。どうしてもその意味に於て自分は佛法の爲に盡す所がなければならぬといふ感激を、日々に新にして又日に新たならしむべく努力して居る次第である。今度佛蘭西の方に於て佛教の研究が熾んになり、又佛蘭西といふ佛法のお寺を巴里に建てることになつて、日佛佛教協會といふものが組織されて、その宣言書が日本へ送られて来た。日本でもこれと同じ協會を拵へて呉れといふので、我國でもやはり日佛佛教協會といふものを造つて、これから始終互ひに策勵をし合ふといふことになるのであるが、それに

して生れて、その釋尊の本懐である法華經に事へることが出来た、して見れば釋尊の説き置かれたる佛法が世に衰へて行くのを見て、又濁つて行くのを見て、これを傍觀して居ることは出来ない、佛法を熾ならしめ佛法を淨めることは日蓮の責任なりといふことを考へられた。その感激興起する所より起つて立正安國論となり、一代の活動となつて、彼の華々しい日蓮聖人の經歷が繰なされたものである。

どうしても人間は一つ感激興起する所が無ければ面白くない、氣が抜けたやうなものだと思ふ。自分は常にさういふ事に就て自分みづからの心も引立て、行かなければならぬものだと思つて居る。活花にしても水を揚げなかつたならば、ごんなに上手に活けた花でもスグ萎れてしまふ。自動車は便利なるものであるが、どんな完全な自動車でもパーンといつて途中でパンクしたならば、モウそれきりどうすることも出来ない。それが市街の中なら宜い

就ていろ／＼感ずる事があるので、その事を御紹介して見たい。私の此の際感激興起した意味は、この協會の宣言書に就てである。

先づこの日佛佛教協會の役員の顔觸を見ると、總裁になつて居るのは現在の佛蘭西大統領ブーメルグと云ふ人である、副總裁は現貴族院議長ドゥーメルといふ人であつて、會長は亞細亞協會總裁レヂイ、副會長は學士會員ベリオといふ人である。それから理事、評議員の中にはソルボンヌ大學總長のシャルレッツチー、學士會員フーシエー、ギメー博物館長アツカン、外務省大臣ピラ、ルーブル博物館長サール、前總理大臣クレマンソー、學士會員バコニール、太公爵ミクラー、その他多數の學者や名士がこの協會の理事や評議員になつて居る。この組織を見ると、大統領も貴族院議長も外務大臣も前の總理大臣も、その他有數なる人々が皆連名して居るのである。さうして三月二十日に巴里のソルボンヌ大學

に於て發會式を舉行したのであつて、その際に宣言書といふものを發表して居る。その宣言書の意味を御紹介して見ると、

佛敎は印度で假死し、支那で假睡して、日本にのみ賑々として熾んである。日本は聖徳太子から以來佛敎を以て國民精神の主動原理とし、之を中心の思想として國民精神を導いて來た爲に日本の精神文化は實に世界に比類の無い美しいものになつて居るのである。是は佛敎の力である、日本の國民精神が佛敎を離れて價値ある譯ではない。吾々はそれが爲に日本の文化、日本人を懂れ尊んで來て居る譯である。そればかりではない、明治維新以來日本は歐羅巴の學問をも取容れ、科學をも取容れて、一層その文明を美しくした、洵に敬服に堪へない。所が他面に歐羅巴の状態は、佛敎殊に大乘佛敎の研究がモウ早や舊くより我が佛蘭西の國には起つて、殊

に或る先輩が妙法蓮華經の翻譯をしてから以來は、頗る佛蘭西の東洋學會では法華經を中心にしたる研究が起つて來た。而して佛蘭西の東洋學會は印度の學問だけでは無い、同時に支那の學問を併せてやるやうになつたから、梵語の研究も支那語の研究も比較して行ふやうになつて來た、さうしてそれを繼續して今日に來つたものである。元來情操が細かくてそれに富んで居るのは日本の民族である、又直観が明かであつて、創造的なる力を持つて居るものは佛蘭西民族である、それが海を隔て、その相互の特色を持ち寄つて文化を造り成して行くといふことになり、さうして文化の寶庫であるといふ佛敎に向つて、兩國民が力を協せて俱に研究を補うて行き、信仰を助けて行かうとするのである。この事業が勃興して來たならば、嘗に現在二十世紀の思想界を豊富にし淨めるばかりでは

ない、西洋東洋の兩洋に亘つての思想を完全に融合せしむることが出来る。佛敎を通して東西の文明は理想的なる融合を遂げる、それに依つて更に全世界の全人類が行くべき今後の大道が開かれて來る、全人類を導く光がそこから現はれて來る、この大任を果すものが日佛々教協會である。それ故にこの協會の現はれた事は人文史上に於て劃期的の盛業といふべきものである。我が協會の使命は大といふべく、誓つてこの實現を期することを茲に宣言するものである。

斯う言つて居るのである。吾々が此の講壇で永い間力説して居ることは、毎も丁度斯ういふ意味合の事を絶叫して來た譯であるけれども、それは日本では吾々が言つて居るのであつて、總理大臣とか外務大臣とかいふやうな人はそんな事は考へて居ない。今度我國に於てもこれと相似たやうな會を拵へなければ

ばならぬといふのに、やはり心配して居る者は佛敎徒の仲間のもくろみであつて、世間の有力なる政治家はまだそこへ力を入れて居ないやうに思はれる。先方の顔觸に比較して、日本が佛敎國であるといひながら、その本國となるべき日本に於て、十分な人が得られないで、ホンのちよつと佛敎を研究し始めたかと思ふ佛蘭西が、大統領を始め有數の人がこの會の役員になつて居るといふ事實を見ると。茲にどういふ感じが起るかといふことを諸君と共に考へて見たい。

日本は佛敎國である、聖徳太子から以來佛敎を國民精神の主動原理にした爲に美しい華が咲いて居るのであると言つて讃歎されて居る、その本國の日本に來て見ると、ポカンとして居るといふか、尻襟いといふか、實に慥慥たる状態になつて居りはしないか。吾々は從來から屢々この講壇に於てその點に苦言を呈して居るけれども、斯ういふ宣言書を見て

尙且つ日本の人々が自覺せざるに於ては、眞に國家に對しても申譯のない事であらうと思ふ。日本はえらい／＼と言つても、それは日本人が内部でえらがつて居るので、何がえらいかといふ、世界に誇るべきものが能く國民に考へられて居ないと思ふ。富士の山が美しいと言ふけれども、いろ／＼格好の良い山は世界にもある、吉野の櫻が美しいと言つても、その位のもので大した誇にならぬ。それは象徴して居るものであつて、その富士の山の如く文化の内に麗はしい精神文化があつて、これを形に象徴して富士の山が美しいといふ所に於て、初めて外國にも誇るべき尊い意味があるのである。唯だ富士の山だけでその奥には何にも無い、それで富士の山を見て呉れ／＼と言つても大したものではない。さういふ皮想な淺薄な根柢の無い國民思想は今日造り替へなければ、日本の眞の價値は發揚せられないと思ふ。故にこの日佛々教協會の宣言書の意味合の如

きは先づ日本の政治家なり教育者なりに講習會でも開いて能く教へたならば宜からうといふ事を、遺憾ながら我國の現状に就ては考へるのである。

又この頃英吉利のグロスター殿下が來朝されて御滯京中に、丁度日曜日或る教會に參詣をされた、教會の方では何の裝飾もしないで、唯だ一信徒として參拜せられたといふ事が新聞に出て居つたが、私は實に美しい事だと思ふ。あれは抑々日本の古來の美風であつた、聖徳太子はじめ歴代の天皇みな佛敎を尊信せられ、さうして朝廷より篤く三寶を敬へといふ事をお示しになつた、その立派な手本が日本では滅びてしまつて、英國の殿下が來られて教會へお詣りになる、ヘーツといつて吃驚するやうな事になつて居るのは如何にも残念な事で、一日も速くこの誤りを改めたいものである。それにはやはり日蓮聖人の志願を繼いで、「弟子一佛の子と生れて諸經の王に事ふ、何ぞ佛法の衰微を見て心情の哀情を起さざ

らんや」先づ日本の國に於て佛敎の復興をはかり、更に是等の佛蘭西の熱心なる人々と力を協せて、大いに眞正なる佛敎を興隆しなければならぬと思ふ。既に佛蘭西に於て斯ういふ會が起つたといふことになれば、日本の小さな宗派的の僻見などは論ずる所ではない、彼等は佛敎の經典そのものに向つて直接研究を進めて行くのであるから、吾々が豫々唱道するところの法華經を中心とし涅槃經、阿含經を開顯したる所の佛敎を佛蘭西人に與へれば宜しいのである。自分は不肖ながら日蓮聖人の指導に基き、又自から多年の研究を重ねて、今日斯様な問題に就て佛敎の如何なるものであるかといふ事を申述べるに就ては相當なる自信を有つて居る、丁度同志の中には其人もあるから、佛蘭西に法華經の思想を發揚宣傳したいと考へて居るのである。

て、日本乃至一圓浮提は法華經の正法正義に依つて教はれるのである。その一圓浮提廣宣流布の端緒が開かれた譯であつて、佛蘭西の大統領や前總理大臣等が署名して、佛敎の研究に依つて全世界人類の行くべき次の大道を開現し誘導するものであると書いて居る、實に今後の全人類の進むべき道が、佛敎の研究に依つて開かれるといふことは明かである。それが即ち日蓮聖人の皆歸妙法の志願である。その事を考へればこの宣言書は實に不思議な因縁のある文章である、この機會に於て大いに日蓮門下は所謂感憤興起して、下らない迷信や譯の判らぬ事をやつて居ないで、所謂日本全國一圓浮提、世界を相手に佛様の御敎が廣大せられるやうに奮闘努力しなければならぬ。それもいゝ加減な事を傳へないやうに餘程吟味して掛らなければならぬ、いろ／＼餘計な事を教へてやつて、後から又訂正するといふやうな失態をしないやうに、先づ最初に佛蘭西人に能く注意

して、佛敎を下手に學んでやり損ふと面倒だから氣をお附けなさいと言つてやつて、さうして眞實の釋尊の本懐の佛敎を、眞面目なる研究の上から佛蘭西人に宣傳することに致したいと希望するのである。

今や正しく佛敎を世界的に擴大すべき日が來たのである。佛蘭西の方から斯様な協會が出來て來たといふやうなことは、此の機遇すべからざる事と考へる。殊に不思議にも法華經を中心にして佛敎を研究すると彼等が言うて居ることも、實に自然の力である。吾々法華經の敎に感激して居る者は、自から斯ういふ結構な、全世界の人類の導かざるべき佛の御敎の中心經典に基いて自分の信心を決定して居るのであつて、實に有難い事である。日蓮聖人が「弟子一佛の子と生れて諸經の王に事ふ」と言はれたやうに人よりも先に本佛釋尊の有難き事に感激を持ち人よりも先に法華經の御敎に信心を捧げて居るといふことに就ては、お互にその歡喜に願ひて亦大いに感

憤興起して責任の自覺を有たなければならぬのである。(拍手)

善男子よ、汝今發心して菩薩道を求め、爲めに一切智を成ぜんと欲す、應に勤めて眞の善知識を求むべし。

善知識のあらゆる教誨に於て隨順を念すべし、違逆すべからず、善知識に於て善巧の方便もてたゞ恭敬すべし、過失を見るなかれ (華嚴經)

實に佛になる道は、師に仕ふるには過ぎず妙樂大師の弘決の四に云く「若し弟子有りて師の過を見さば、若は實にもあれ、若は不實にもあれ其心自ら法の勝利を壞失す」云々

(日蓮聖人身延山御書)

祖書五大部の綜合觀 (其二)

大僧正 本 多 日 生

(論三三頁)

先づ安國論に就て見るといふと、安國論の一番の骨子は、法然上人が撰集を書いて、それが弘まつた事がいかぬといふことである、安國論の實際問題としてはそれが長く書いてある。それは何かといふと曩に言ふ阿彌陀如來を擔ぎ出して來て、お釋迦様を忘れてしまひ、随つて法華經も忘れてしまふ、この釋尊に背き、法華經を捨てる所に撰集の弊害を論じたのが、安國論の大部分の教義である。そこで自分の誓願を言ひ表はされて居る言葉は、

予少量たりと雖も大乘を學す。若蟻驥尾に附して萬里を渡り、碧蘿松頭に懸つて千尋を遠ぶ、弟子一佛の子と生れ諸經の王に事ふ、何ぞ佛法の衰微を見て心情の哀惜を起さざらんや。

これが最も日蓮聖人の思想の高潮に達して居る所である。又その言ひ表し方も實に能く整うて居ると思ふ、自分は少しばかりだけれども、大乘の敎を學ぶことが出來た。——少しばかりといふことも、實は澤山お學びになつて居る譯だけれども、自分の身を謙遜せられて少量と言はれた。さうするとその大乘殊に法華の敎に絶つて見れば、丁度蟻が千里を走るが如く、或は蘿が松に懸つて行けば高い所に登れるやうに、法華經に絶つて進んで行けば、人間のやうな者でも立派な考も出來、活動も出來る。そこで自分は一佛の子と生れて——この「一佛の子」といふことが大事である。前に言つた統一神的本佛の

その愛子で、さうして諸經の王たる法華經に事へて居るのであるから、この佛教の全体は自分の心配しななければならぬものである。それはどういふ意味かといふと、佛法各宗ありと雖も釋迦の佛法である。この「釋迦の佛法」といふことは大事な語である、釋宗が幾ら釋迦が要らぬと言つても釋迦の佛法である、淨土宗や眞宗が阿彌陀様ばかり言うて居つてもやはり釋迦の佛法である、眞言宗が大日如來を擔ぎ出してやはり釋迦の佛法である。斯ういふ所に日蓮聖人の非常な強い信念があるのである、だから「一言二言には過ぐべからず」ぐづ／＼言うてもお前の佛法は釋迦の佛法ではないのかと言へば濟んでしもふ、ないと言つたら偽佛法だ、釋迦の佛法だと言つたら何故釋迦の言ふことを聽かぬか、それでギヤフンと參つてしまふ、早勝問答式に日蓮聖人は出て行く。だから丁度槌を以て培格を割るやうなものである。「お前の佛法は釋迦の佛法か」「ノウ」と言う

たら「それは偽ものだ」ボン……「さうです」と言つたら「何故釋迦の言ふことを聽かぬか」ボン……斯う行くのである。それが安國論のやはり大事なる所である。弟子一佛の子と生れて諸經の王に事ふ、何故釋尊を蔑ろにするか、日蓮門下にしてそこを考へないで釋迦を蔑ろにして居る、柴又へ行つても帝釋様で、お釋迦様はと言へばそんなものは居ないと云ふ、中山へ行つても堀の内へ行つても池上に行つても、お祖師様はござるけれども、何處へ行つたらお釋迦様が居るか、それは天竺でせうといふやうなことを言つて居る。さうして日本は日蓮聖人だ、日本の佛法は日蓮の佛法だと言つて、無暗矢鱈に日蓮々々といふ名ばかり附ける居るが、釋迦の佛法といふことを忘れたならば日蓮の佛法も偽佛法ではないか、その痛い所がわからないほど暗愚であつては話にならない。

基督教の方で言つたならば、ユニテリアンといふ

やうな派は随分自由主義を執つて、基督ナンといふものは神の子ではない、人間の中の上出来の者で、吾々の手本とするに足るものである、神の子なら手本にはならないといふやうなことを言つて、三位一體説を破り、基督が神の子であるといふことを否定して吾等と同じ人であるといふ。そのユニテリアンでも基督佛でないといふことは言はない、基督の本當の精神がそこにあると言つて居る、何も基督は、我は神の子だと言つて威張つたものではない、斯う言ふので、ユニテリアンでもそれが基督教にあらずと他の福音派から言はれることを非常に嫌つて、ナニこれが本當の基督教だと言つて居るのである。ところが今の日蓮宗などのやり方では、所謂釋迦の佛法ではない、それは初めからモウ佛法ではない、印度の佛法は釋迦の佛法、日本の佛法は日蓮の佛法、それは初めからさまつて居りますよといふやうな暢氣な輩が居るのだから話にならぬ。そんな亂暴なこ

とはない、どうしてもこれは「釋迦の佛法といふことを忘れて居るか」といふことに依つて鐵槌を下さなければならぬ、日蓮聖人の遺文の鋭鋒といふものはそこにある、安國論もその意味になつて居る。その意味は何故それ程に釋尊に力を入るかと言へば、その中心は開目鈔に現れて居るやうな思想があるから、そこで念佛宗が釋迦を忘れて阿彌陀様に行くといふことは、絶對の主師親三徳の履き違ひであるから、それは許せないといふ根本の思想から出て來る譯である。

無論日本にとつては日本の神様を大事にする、統一神的思想でありますから、天照八幡等の護國の神々ど、吾々の信する本佛との間には非常な調和融合點があつて、日蓮聖人の如きも能く敬神の觀念を言ひ表はされて居る。これが又大事なこと、神道の方から言うても、唯だ日本の神様だけ振廻して、それで一切の宗教を壓迫するといふ考があつたな

らば日本の國は立たない。最早やこれだけに基督教も日本に侵入して来て居るし、世界的にいろ／＼な思想があつて宗教といふものが分れて居る。日本の國の神代の神様、天照大神とか國常立神を以て、あれが宗教絶對の神だとすれば、建國史に遡つて縱横無盡にこれを批判し盡されて、日本の國はそれが爲に國体までも傷つに至るのである、これは明瞭なことである。それは神道のあゝいふ神様といふものに依つて、他の一般宗教の高等なる信仰、思想、研究を壓迫することになる。さうするとその壓迫される仲間が非常に多くなつて来るから、大事な國家の礎もそれに依つて覆へるかも知れぬやうなことが起る。だから純粹に神道の神様だけを信じて、それが萬能であらゆる宗教を排斥するよりは、本佛釋尊の教に依つて、日本の神様は日本の國の神様として、そこに敬神の觀念を捧げて行くといふ、この日蓮聖人の行き方が本當は宜しいのである、それが眞

の愛國者である、この點が日蓮主義者と一般の國体論者との違ふ所である。たゞ日本の神様が有難い、たゞ明治天皇が有難いといふだけで行つて、法華經の如く本佛釋尊の威徳を説て宗教上の満足と與へ、それと共に所謂法を知り國を思ふと日蓮聖人の言はれるやうな點が少しも無いとすれば、安國論といふものは出て来る筈がない、何故に法然などを攻撃するか、たゞ日本の國体の尊嚴を説きさへすれば宜い譯である、法然の誤謬などを擧げて居るのは餘計なことだといふことになる。又その次に開目鈔が出て來て主師觀三徳などといふやかましい事を言ふのも要らぬことである、撰時鈔、報恩鈔、本尊鈔も皆同じことになつてしまふ。であるから餘程能く日蓮教學の中心思想を押へて、從順に日蓮教學の正統思想といふものを履き違へぬやうにして、それに依つて法國の恩に報ゆるといふことに行かないと、たゞ一時その場を巧みに上手に言つたからと言つて、大

聖人の御趣意に反して居つては駄目である、そこが吾輩の心配する所である。

安國論の中で開目鈔の要點と最も關係の多い事柄は、撰集に對する非難と「弟子一佛の子と生れて」の誓願と、それから後に現れて來るところの「實乘の一善」といふことである。その實乘といふものは即ち開目鈔にあるのである、さういふ點から合せて考へて來ると、開目鈔の大精神、即ち釋尊の有難いといふことが根柢にあつて立正安國論が出来て居るものである。開目鈔の思想がなければ正しきを立てると言つても何が正しいか、その正しいといふものが無くなつて來る。そのやうにして開目鈔と合せて安國論へ考へなければ、安國論の根柢が明かにならぬといふことを始終念頭に置いて、安國論を讀まなければならぬ。國家の爲に盡す議論を吐きかけると、唯だ國家の事だけ言ふやうになつてしまつて、本佛の威徳光揚を忘れての國家愛だけを説く者

は、それは眞の日蓮教學ではない。

次に本尊鈔の方に於て開目鈔の精神を見れば、本尊鈔は最も能くその精神が現れて居るのである。最初に吾等と佛との關係を説く所に、尊き壽量品の本佛を擧げられ、さうしてその本佛と吾等の關係がどう結付くのかといふことになつて、南無妙法蓮華經を通して本佛の功徳を吾等に譲り與へられるといふ所に於て、この尊き壽量品の佛と自分との關係を解釋したものである。それは澤山の書物を擧げて來

文の心は釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す、我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り與へたまふ。(龍三十八頁) お釋迦様の因行としての菩薩行、果徳としての成道以後の衆生濟度の功徳、その因行果徳の大功徳が妙法蓮華經の五字の文字の中に具はつて居る、それ故にこの五字を受持信念すれば、自然に釋尊のその功

徳を譲り與へ給ふのである。妙法蓮華經の内容が釋尊の功德である。それが一番善い解釋である、たゞお題目が獨立して有難いと思つて、お釋迦様の功德が含まれて居るといふことを知らないのは、珠の脱けた袋みだやうなものである。所謂ドンドコ法華の輩は袋だけを振廻して居る、お釋迦様の有難いといふことを考へない、それでは本尊鈔の意味は些つともわかる譯がない。

この佛と吾等との關係を天台は觀念に依つて感得しようとしたのであるが、日蓮聖人は觀念でない信行に移して、題目を唱へ、題目を信する所にその釋尊の功德を讓與するといふ關係に依つて、佛と吾等とを結びつけたものである。即ち自然關係ではない、佛と吾等と自然的に關係して居る譯ではない、これを意匠的關係、精神的關係と自分は解釋して居る。精神的關係といふのは、お釋迦様の方からはどうぞ救つてやらうといふお考と、こつちはどうぞ佛様

要するに罪障が深いといふことになるだらう。斯ういふ善い書物を読んでもさういふ有難い所がわからぬ、お自我偈を讀んでも本佛が實在でちやんとござるといふ尊さがわからぬといふのは、如何にも憐れなものである。

それから本門の本尊といふことに就て脇土の問題がある、お釋迦様は同じ佛ちやけれども、脇土に依つて價值が違ふ、小乗の釋尊は迦葉、阿難が脇土、權大乘並に涅槃經、述門の釋尊は何れも文殊、普賢が脇土である。併しそれは壽量品の佛ではない、壽量品の佛といふは、即ち本化上行等の菩薩が脇土になられる場合を言ふのである。お釋迦様は小乗から本門まで同じことであるが、たゞ脇土に依つて違ふといふのは即ち表し方である、木像などに表はす時分に、お釋迦様の側に迦葉、阿難の相のものが坐つて居れば小乗の釋尊であるとして見るといふだけのものであつて、活ける釋尊如來には小乗の釋迦

に成りたい、それにはお釋迦様の有難いことを考へて、それに感激したる精神を以てこれに向ふ、その間に南無妙法蓮華經があるので、たゞ何も考へなしに南無妙法蓮華經と唱へて居るものではない。釋尊の慈悲、釋尊の功德を簡めた題目、吾々が釋尊を渴仰する上に現れたる題目でなければならぬ。その結合は、言葉は南無妙法蓮華經だけでも、精神的關係は釋尊の慈悲と吾等の渴仰との結合である。釋尊に慈悲なく、吾等に釋尊に對する渴仰無くして唱へて居る題目は役に立たぬ、又そんな下等な宗教を以て世界の統一ナンといふことは出来ない。どんな結構な言葉でも、たゞ語が善いといふやうな眞言的のものではいけない、活きた宇宙に於けるとこの絶對無上の大人格者を得て、そうして吾々の心の奥の誠心の信念と結びくのである。その活ける絶對本佛を除外して、語がとうたかそんな事を言つても駄目である。それは學問の道行が悪かつたといふか、

も本門の釋迦もありはしない、たゞ常住不滅、絶對無上の本佛が在ますのみである。經文の上でいろいろに説いてあるからと言つて、幾らも御幣でも列べたやうに拵へて見ても何にもならぬ、それは無理に議論するだけで、お釋迦様は一つだけである。小乗の釋迦だの權大乘の釋迦だのと言つて、木像を列べたやうなものがあるのでない、たゞ木像を列べた場合に見分をする時分に、迦葉阿難が脇土であればそれは小乗式の釋迦である、小乗式といふのは一つの寫象式であるから、さういふ造り方を佛師がしたならばそれは小乗の釋迦である。文殊普賢の脇土になつて居るのは述門以下の釋迦である、上行等の菩薩を送り成したならばそれが本門の釋尊といふことになる。だから寺を拵へて寫象式の斯ういふものを安置しようとするならば、本佛並に四菩薩を造立しなければならぬ、それは四菩薩造立鈔に依つて『本佛本脇土を造るべし』といふことがある、それ

はたゞ寫象式である。だから造立と言ふ、造立といふのは形に現はすので、形に造らぬでも實在に在しますものはある、それが上行菩薩を側にお伴れになつて居らうと、お伴れになつて居なからうと、そんな事は構はない。吾々は壽量品に顯本せられた絶對本佛として信すれば、お側に上行菩薩がござるか、ござらぬのかなどいふことは心配しなくても宜い、たゞ絶對無上の釋尊を尊信すれば宜いのである、こんな所に引つ掛つて居るのは、縦ひ日蓮聖人が論ぜられたからと言つても大した價値のあることではない。開目鈔に於て絶對的主師親の三徳、さうして所謂儒外内の三道皆これを光顯するにあり、壽量品の一品に於て一大事決了せりと論じた、この堂々たる論結が日蓮教學の生命である。小乗の釋迦であるとか、述門の釋迦であるとか、そんな事をこぎつて言ふ處が一番よいのではない、實在の釋尊として考へたならば、そんなものを造立しないからと言

つても差支ない譯である。造立の點に於ては寫象式といふものが大事であるけれども、造立しない場合に於ては絶對本佛で宜い譯である。けれども茲に於てやはり釋尊を中心にして本尊が論じてあることは非常に明瞭なことである、何も他のものは問題になつて居ない。即ち小乗、權大乘、述門の釋尊等を中心にして寺塔を建立したけれども、本門壽量品の本尊並に四菩薩を造立したものが無いと言はれる、この場合の本尊といふ語も釋尊である、それは「壽量品の佛」とその前に言はれて居るもの同じことである。又後に至つて四菩薩が出現して壽量品の釋尊の脇士となる。

此の時地涌千界出現して本門の釋尊の脇士となり、一闍浮提第一の本尊此の國に立つべきなり。(縮一九四頁)

「本門の釋尊の脇士」とある、これも本門の釋尊といふことに就て、あゝだとか斯うだとかいろいろ議論

論をするけれども、それは附加へた話で何も面倒に言ふ必要はない、釋尊中心の本尊がやはり一闍浮提第一の本尊である。斯く通じて觀心本尊鈔を見るに、別段曼荼羅式の本尊に就て喧しく論じてあるのではない、飽くまでも釋尊を中心にしてその釋尊の絶對の尊さを見る見ないといふことを論じてあるのである。

幼稚の頭である吾々の信仰に懸ける爲に、本化の菩薩が日蓮聖人となつて出現し給うた譯である。故に觀心本尊鈔全体を通じて、やはり釋尊中心の思想に就て本尊が論じてある。開目鈔の思想と少しも違ひはないのである。

それから撰時鈔はどうかといふと、これ亦釋尊の尊さを盛んに現されて居るので、神力品の南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛の文を擧げて

南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と一同に叫びしがことし。(縮一九四頁)

文が結んである譯である。佛大慈悲を起して妙法五字の袋の内に此の珠を裏みて末代幼稚の頭に懸けしめたまふ。(縮一九四頁)

その佛が大慈悲を起すといふことが根本を成して、それから佛が妙法五字といふ文字の袋の内に、此の珠といふのは前に述べた釋尊の因行果徳の功徳の珠を裏んで、末代幼稚の吾等の信仰の頭に懸けさしめ給ふ譯である。そこで佛の大慈悲が起點で、この妙法五字の袋の内にその佛の功徳の珠を裏んで、末代

これは非常に大事なことで、南無妙法蓮華經と法華宗は皆言うて居るけれども、それは南無釋迦牟尼佛の精神から離れて言うて居るのではない。南無釋迦牟尼佛といふことが大事ナンだけれども、法華經に歸依するといふことに依つて今の釋尊に歸依する精神を表して居るのである、法華經といふものは壽量

品が中心で、壽量品は前に言つた通りの意味合であるから、妙法蓮華經に歸依するといふことが、「佛大慈悲を起して妙法五字の袋の内に此の珠を裹みて」といふ、佛と法華經と吾等の關係を皆綜合して居るから南無妙法蓮華經と唱へるので、佛を忘れて唱へる題目、たゞ文字だけの題目、或は宇宙神教的の題目、斯ういふものであつたならば本當の意味に於ける日蓮聖人の本意から出た題目ではない。(佐渡已前にはさういふ事もあるけれども)だから「南無釋牟尼佛、南無妙法蓮華經」といふ意味は離すことの出來ない關係に見なければならぬ。それは即ち本尊鈔の結文、若くはその前にあつたところの釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足するといふことと依つて明かである。その他の遺文を以て言へば法蓮鈔の、

母の食物の乳となつて赤子を養ふが如し。

(一五八)

これに就いていろ／＼又愚論を吐く者があるけれども、明瞭にこの通り「本門の教主釋尊を本尊とすべし」とある。又その他の御遺文に於て釋尊を大事にせられる事柄は、それは日蓮教學の大綱であるから、何處でも釋迦如來の威徳尊嚴を發揚しないことではない。その事は吾輩が前年遺文の全体に亘つて請じた「聖訓要義」又は「聖訓摘要」に於て明瞭な事である。殊にこの五大部の中に於ては無論さういふ御遺文が澤山あるが、主なる所一箇所だけで、報恩鈔が開目鈔と一致するものであるといふことがわかる譯である。撰時鈔も前に擧げたところの語に依つて「釋迦の佛法」といふ強い意味に於いて明かである。その他撰時鈔には釋尊の出現に就ての關係が阿私多仙人の事などに托して詳しく書かれて居る。本尊鈔は前に詳しく述べたが如く、安國論も前述の通りであるから、開目鈔に現れた絶対本佛の尊いといふ思想が、だゞ開目鈔に限つたものではない、それ

法華經が乳であるといふのは、即ち釋尊の御力に依つて消化されて居るからそれが乳になつて出るのである、母といふのは釋尊である、乳房が妙法蓮華經である。さういふ文は撰時鈔に割合に澤山ある、さうして前に申した通りに「釋迦の佛法」といふ語が最も能く撰時鈔に於いては使はれて居るのである。釋迦如來の佛法をばいかなるものか失ふべき。釋迦の佛法を失ふべからず。(一三三九頁)

といふやうに釋迦の佛法といふ語を非常に能く解釋されて居るのであります。その他撰時鈔の中にも釋尊を中心とした思想は數多く現れて居るが、それは略して置く。

次に報恩鈔であるが、報恩鈔はこれは又有名な最後の三大秘法の大事な所に至つて、ハッキリと本門の本尊を言ひ表はす語がある。

一には日本乃至一閻浮提一同に本門の教主釋尊を本尊とすべし。(一五〇九頁)

が安國論の大事な思想であり、撰時鈔の大事な思想であり、撰時鈔、報恩鈔の大切な思想であつて、それが日蓮教學の宗教的の根本精神を成すものである。それ故に國家的の觀念を鼓吹する場合に於てもこの開目鈔の思想を忘れるとか、又餘り長い間取上げて置くといふことはいけない、始終先づ宗教の信解の方から絶対本佛の尊さを信解し感孚しつゝ、さうして他の文と聯繫を取つて行かなければならぬ。若し強いて一番大事といふことを言ふならば、それは開目鈔の絶対本佛の信念がなければ宗教としての日蓮教學といふものはその生命を失ふものである。それは要するに前に擧げた開目鈔の冒頭の「夫れ一切衆生の尊敬すべき者三つあり所謂主師親これなり」云々の文と、それから二十四枚目と稱して居る「發遣顯本せざれば實の一念三千もあらはれず」云々の文、この二つを始終念頭に置いて行けば大過無いであらうと思ふ。この二つから離れて居るやう

な思想は、ごんなに立派に組立て、も先づ日蓮教學では卒業は覺束ないものであると考へて置いたら宜からうと思ふ。

恩報鈔を中心としたる考察

これ迄は開目鈔を中心とした五大部の綜合觀を述べたのであつて、即ち開目鈔は宗教信仰の中心にして、吾等の信心を捧げる對象であるところの佛様に就て、その眞實を示されたものであるが、これは唯だ開目鈔ばかりではない、本尊鈔も立正安國論もその他日蓮聖人の御遺文の五大部といふものは、孰れも開目鈔に顯はれて居る御趣意が一貫して居るので、信仰の問題から眺めた時分には、開目鈔を中心にしたる今申す本佛の事柄が五大部に亘つて説かれて居るのである。即ちそれは開目鈔だけの思想ではなくして、五大部はみな同じ意味合に現はれて居ると申して宜しいといふ意味を立證したのであ

る。更に第二に報恩鈔を中心としたる思想から五大部を眺めて見たならば、やはり同じやうに五大部いづれも報恩鈔に現はれて居る報恩道德の思想がその中に顯はれて居ることを観るのである。

報恩といふことは道德上の事と考へられて居るのであるが、併しそれがその儘やはり宗教の信仰である、純信仰といふことを唯だ有難いとか、頼むとか、助けて貰ふとかいふ風にのみ考へた人もあるけれども、佛敎の根本から考へると、佛敎の信仰そのものがモツと内容の充實したものである。有難いといふ心の中には、直にその御恩に對して感謝する、即ちその恩に報ひんとするところの精神があるのである。佛様の事に就ても、佛様に有難いといふのは、護つて下される、救うて下される、導いて下される、護つて下される、教うて下される、思ふとときに、その御恩に對する感謝の精神になつて、即ちそこに道德的の行爲がスグその信仰の中に現はれて居

るものである。それは日蓮聖人の信仰を拜すれば直ぐにわかるので、日蓮聖人が本佛釋尊を信せられて居る、その釋尊を有難く思はれる精神の中には、その佛様の御恩に感激をしてさうして一切衆生を救ふどころの活動になつて現はれる。佛の恩に報ずると同時に、その御恩報じの事を衆生濟度の上に移して、そこに働く菩薩行が即ち佛恩を報ずる所以であると日蓮聖人はお考へになつて居るのである。

それは恰も忠臣が君の有難いことを考へると同時に君恩に感激してさうしてその忠義の行動は國家を護り國民を助ける行爲になつて現はれて來るが如きものであつて、その全體が一個の忠義といふものである。君に對して唯だ有難いと思つて居るだけだ忠義ではないのである、その皇室の恩徳に吾等先祖以來護られて來た、護られて來たから御恩がある、御恩があるからそれに報ひなければならぬ、報ひるには君を護ると同時に國を護り國民をまもること

ある、さういふ愛國的行動となつて現はれて行くといふまでが一つの忠義であるのであつて、それを小さくこざつて、唯だ先祖代々護つて貰つて居つたのが有難いのだ……その有難く思ふといふ事だけが忠義ではないのである。有難く思ふから御恩に感激する、感激するから活動するといふまでが一つの連絡であつて、つまり忠義といふ事の内容がさういふ風に充實して居るものである。

その通りで宗教の信仰といふものも、有難いと思ふ心からその御恩に感激し、感激するから善き行爲をするといふ道德行動まで、ズツと續いて居るものが一つの信仰であるのである。それを信心といふものを唯だ何でも易いものにしようといふので、ダン／＼小さくしてしまつて、そこは要らぬ、それも要らぬ……といふ工合にして、モウ極く僅かな事を以て信仰といふことを説かうと試みたものがある。それは眞宗のやり方がサウである、阿彌陀様に頼むと

いふことも餘計な事である、向ふから助けてやらう
 と言はれて居るのに、頼むナンといふのは餘計なこと
 である、親は子供を可愛がつて護つて居るのだから、
 親の所に行つて「どうぞ私を可愛がつて下さい」ナン
 と言ふのは要らぬことである、「有難うござ
 います」とイキナリお禮を言つてしまへば宜いのだ、
 といふやうな事からだん／＼信仰といふものを分
 解して、その中の極く僅かの部分のものを採つて
 信仰を解釋し、さうしてその他の意味合は要らぬも
 のである、邪魔になるといふ風なことを非常にやか
 ましく言つたのであるが、吾輩はさういふ行き方は
 間違つて居ると思ふ。寧ろ信仰といふものゝ内容は
 豊富に考へて行く方が宜しいと思ふのである。即ち
 佛に對して佛の有難いことを考へ、護つて貰ふこと
 を考へると同時に、スグそこに御恩のあることを考
 へ、その御恩に報ひるが爲にはそれだけの道徳行動
 が現はれて来るもので、一つの信仰の發動として見

て行つたら宜からうと思ふ。何處から何處までは信
 心で、何處から何處までが道徳だといふやうな、さ
 ういふ小別をしない方が宜しいのである。
 さうすると開目鈔で説かれた佛様が有難いといふ
 ことの中に、スグに報恩の道徳といふものが現はれ
 て来るのである。宗教信仰の意味に於て佛様の尊い
 意味合を明かにし了つたときは、その尊い意味合に
 感激した精神、即ち報恩の精神に活躍して行くので
 あるから、開目鈔を報恩の意味から觀れば、開目鈔
 も亦その通り報恩の道徳思想に依つて活躍して居る
 ことがわかるのである。併しそれが表面にあらはれ
 て居るのが報恩鈔である。

報恩鈔はこの報恩のことを表題にも掲げられて、
 それを主にして説かれて居る。これは師匠道善房に
 對して追善のために二卷の書を書いて、それを弟子
 に持たせて身延から房州に贈つて道善房の墓前に於
 てこれを讀ませられたのであるが、師匠道善坊は善

い人ではあつたけれども心の弱い人で、反對者があ
 る爲めに日蓮聖人のなされ方に十分賛成をされて居
 ない、左右を顧るが爲めに先づ日蓮聖人に對して
 は反對の方へと隨いたやうな状態になつて居つた、
 何處かで日蓮聖人の御教導——正しい意味の佛法、
 法華經を中心にしたる正法正義の宣傳に與せられて
 居れば、その點を以て師匠道善房が助かる事を見出
 さうとして、日蓮聖人は非常に師匠思ひの上から苦
 心された。どうぞお師匠様が地獄に墜ちるやうな事
 のないやうにしたいと思ふけれども、靜かに道善房
 のなされたる行動を考察して見ると、正法の味方に
 なつて居ない、腹の中では日蓮のやり方を賛成せら
 れて居つたやうに思ふけれども、表面に現はれて居
 る行動から見れば正法正義の味方ではなかつた、洵
 に残念なことだけれども、例へば日蓮が佐渡ヶ島に
 流されて居る間に一本の手紙も下さつたこともな
 い、便をなさらうと思へばなさる機會がない譯でも

なかつたらうけれども、さうして居るかといふ一言
 のお尋ねもない。いろ／＼さういふやうな點を列べ
 られて、左右が恐ろしい爲めに、それは反對者が澤
 山居るのであるから、そこで日蓮に賛成すれば自分
 も流されるやうになるとか、或は清澄の寺を逐ひ出
 されるやうなことになるかと思つて、さう
 いふ自分の身を庇ふために弱い所があつて、日蓮聖
 人に賛成が出来なかつた。さうするとドウ考へて見
 てもこれは地獄に行かれないかなければならない、師匠道
 善房は法華經の味方ではない、さうして見ればどう
 も地獄は助かり給はないやうに思ふ、師匠を地獄に
 墮してその儘にして置くことは日蓮としては出来な
 い、どうしたら宜からうかといふ事をズツと論ぜら
 れて、さうして最後に、自分が法華經の爲めに命を
 懸けて働いた、この法華經弘通の日蓮一代の功徳を
 その儘御回向を申上げて、そつくり日蓮の功徳をお
 師匠様の方へ持つて行つたならば助かり給はないこ

とはなからう、日蓮が法華經の爲めに味方して働いたこの功德の全部をお師匠様に捧げたら、地獄に墮つべき道善房も助かるであらうといふ意味を懇々と書かれて居るので、まことに情理を盡して居る御文章である。

そこに自から日蓮主義の行き方がわかるのである、正義の方から論すれば師匠は助かる途はないけれども、情の方からして功德を贈つてどうぞお救ひしなければならぬといふ、そこに又熱烈なる大聖人の師匠思ひの情が動いて居る。さうして最後に「花は根にかへり眞味は上にどくまる」と言はれて、花が咲いたといふのは根から水分が上つたから咲いたのである、日蓮が法華經に味方をする活動は師匠道善房の所で養うて貰うたからである、師匠道善房は限であり、日蓮は法華經弘通の華が咲いて居るのである、その花の功は根に歸さなければならぬ、日蓮の法華經弘通の功德は道善房に歸すべきものである。

るといふことを書いて、さうしてお師匠様の助かることを念ぜられた。さういふ風に非常に道德的の事柄でありますけれども、それがその儘やはり日蓮聖人の信仰である。

故に報恩鈔の最初には、禽獸すらも恩を報ずる例があるといふことを挙げられて、老狐はつかをあとにせず、白亀は毛寶が恩を報ず。畜生すらかくの如し。況んや人倫をや、されば古への賢者豫讓といひし者は劍をのみて知伯が恩にあて、弘演と申せし臣下は腹を割いて衛の懿公が肝を入れたり、いかに況んや佛教をならはん者、父母師匠國の恩を忘るべしや。

とお書出しになつた。老狐といつて年とつた狐が死ぬる時分に於ても、自分の産んで貰つた穴の方へは腕を向けては死なない、上野の山で産んで貰つた狐が亀戸の方へ行つて死ぬならば、決して西の方へは腕を向けないといふ、傳説ではあるけれどもサウ言

傳へられて居る。又支那の毛寶といふ人が、子供の玩弄にして居る龜を助けて濠へ放してやつた、他日毛寶が戦に敗れて城の裏手から逃げる時分に、濠を越へることが出来なくて困つて居つた、所がその龜が中心になつて澤山の龜の仲間を誘うて来て濠の水も見えない程に集まつて居る、その龜の脊中に乗つて毛寶は無事に濠を渡つて助かつたといふ話がある。畜生すら斯の如くに恩を知つて居るのである。

況んや人間にして恩を受けて恩を報ずることを知らないやうな者は畜生にも劣るものである。だから人間は誰でもこの報恩の觀念を以て道德の中心にしなければならぬから、世間の方でも晋の豫讓といふ人は、知伯といふ人に恩を受けたが爲に劍を呑んで自殺して、さうして君の恩に報ひたといふ事がある。又弘演といふ人は、自分の主君の懿公といふ人が敵に殺された時に、支那はその時分でもやはり殘虐な事をやつたので、敵であるといふので殺した上にそ

の腹を割いて、腸を引摺り出してその跡へ礫ころを詰めたりするやうな事をするのであるから、弘演は、これは必ず敵がやつて来て懿公の腸を引摺り出して殘虐な事をするに違ひないといふので、自分の腹を割いて主人の腸をその中に入れて、斯うして置けば敵の爲に主人の肝が蹂躪せられることはなからうといふので、自分の腹に主人の肝も入れ換へて死んだ。それはナカ／＼出来難い事であるが、さういふ風にして主君の御恩を報じて行くといふ事が世間にすらあるのである。況んや佛法をならふ者は、尙ほ更それ以上に報恩といふことを佛が教へられて居るのであるから、父母の恩、師匠の恩、國の恩を忘れてはならないと書かれたのである。

茲に日蓮聖人が、父母の恩、師匠の恩、國の恩といふ風に言はれる所が尊いのである。無論佛の恩、三寶の恩といふものは大事であるけれども、續いて父母の恩、國の恩といふやうな世間の恩といふこと

を併せて説かれる所、これが佛教の根本問題ナンである。世間の方では父母の恩、君の恩を説いて、三寶の恩、天地の恩といふやうなことを忘れたがるのである、忠孝の道德を説いても佛恩を忘れる人は一パイ居る。又宗教の方では神や佛の恩を説いて、さうして世間の恩を忘れる者がある、多くの坊さんなどでも、出家すれば親の恩はモウ宜いのぢや、親子の縁を断つたのぢや……といふ風な事を普通坊さんが言ふし、又日本の多くの人はサウ考へて居る。坊さんはモウ親子の縁を断つた、親子の事など考へて居るのは俗情である、俗情を脱却したる沙門の身は、父母ナンといふ言葉は一生活ふべきものではない、さういふ事を古來偉い坊さんと言はれたやうな人も言うて居るが、それは非常に間違つて居る。何處が間違つて居るかといふと佛様の教から見ても間違つて居る、そんな事を物好に、「俺は坊さんだから佛の恩は感ずるが世間の恩を忘れる」とか、世間の人はま

た「俺は佛法信心しないのだから親の恩だけ知つて佛の恩は忘れる」とか、そんな事が勝手に言へるものではない。人間といふものは必ず四恩といふものがある、更に加へれば六恩といふものが平等に負荷して居ると説かれるのが佛法である。何人も雖も四恩、六恩といふものを受けて居らぬ者は無いといふのが釋尊の教である。坊さんだからといつて親なしに生れた者は一人もありはしない、坊さんに親の恩が無いといふ理窟は何處にもない。又宗教家と雖も國王の恩を受けない者はない、そこを世間の人も佛教の人も一つハツキリして重かなければならない。釋尊の教は、その有恩の所を明かにせよといふことから説かれる、恩の有る所を間違へないやうに調べ行かなければいけない。親の恩もあれば君の恩もあり、世間の恩もあれば天地の恩もあり、夫婦の恩もあり師匠の恩もある、それを親の恩だけ考へて夫婦の恩を考へなかつたり、天地の恩を考へて國の恩

を考へなかつたりする、その有恩の所を考察するに於て辨すればそれは大きな間違ひであるといふのが、元來佛教の議論の出発點である。先づ有恩の所を明かにし、さうして知恩報恩といつて、恩を知つて恩を報ぜよ、その恩を知るといふ事に於て遺漏のないやうに考察を遂げろといふのが釋尊の大説法である。

どうして左様に恩を知ることにて缺けてはいけないといふ議論が起るかといへば、根本は「小恩すら尙ほ報す」といふことから出て來て居る、小さい恩でも忘れてはならないといふのが原則である。例へば橋の無い川を渡る時分に、一錢か二錢の渡し錢が無い爲めに困つて居る時に、「私が出して上げませう」と言つて一錢出して呉れた人があつた爲めに渡船をわたることが出來たとか、或は雨が降り出して雨具がなくて困つて居る時に、「あなたの中にお入りなさい、そこまで行けば又傘屋もありますから……

……」といつて、半町の道でも相合傘で一緒に行つて呉れたとかいふやうな事は、小さな事であるけれどもそこに恩といふものがある、それでも忘れてはならぬといふのが報恩主義の道德の原則である。けれどもそれを一々算へ立てたら五百にも千にもなつてしまつて仕方がないから、小さき恩すら忘れてはならぬけれども、その中で大きな恩としてどうして忘れてならないものといふのが四恩、六恩といふことになる。これは大恩といふことになつて來たのだから、その大恩の中で一つでも半分でも落すナンといふ事は出來ない、小恩すら落してはならない、併し一々は覺えて居れないから、小恩の方は時に行届かぬ事があるにしても、大恩に於てはどうしても報じなければならぬから「小恩すら尙ほ報す、いかに況んや大恩をや」小さき恩すら報じなければならぬのに、大恩を忘れるの、落すのといふ事があつてはならぬといふことが、阿含經に於て釋尊の懇説して

居るところの論旨である。さうすると親の恩だけ言つて佛の恩を忘れるとか、坊さんになつたら佛の恩だけ知つて親の恩を忘れたとか、さういふ風に大恩の中でもまだ忘れて行くやうなやり方は、佛敎の敎へる原則に反して居る。假令親鸞上人が言はうが法然上人が言はうが、誰が言つても釋尊の敎の根本に反して居るものである。又論理の合法的説明から言つても、報恩主義を説けばどうしても今吾輩が言ふやうに説かなければ意味を成さない。自分の都合で恩の有る所を勝手に決めるといふやうな譯のもではないのである。

その大恩といふ事はどうして出て来たかといへば、四恩の立て方は、家に於て言へば父母の恩、社會に於て言へば衆生の恩、お互に所謂共同生活をして居るところの相互の恩といふものである。國家を中心にして考へたとき國王の恩或は國の恩といふことが出て来る。それからこの廣い天地を中心

したときに於ては、即ち天地の恵、天地の恩、その中心には三寶の恩、宗教の恩といふ言葉が現はれて居る。だから家庭中心、社會中心、國家中心、宇宙中心といふこの四つの中心に於て、人間といふものはあらゆる道德問題でも何でも研究されなければならぬ。人を家庭の人として考へ、社會の人として考へ、國家の人として考へ、天地の人として考へる場合があるから、その範疇に於ての一番大切なものとして、家庭では父母、社會では相互の恩、國家では國王、天地に於ては三寶の恩といふものを敎へたものである。だからこの四つの大恩といふものは、自分の勝手にそれを減らすなどといふことの出来るものではない。

この四恩の他にモウ一つ加へる場合には師匠の恩といふものを加へられるのである。人間といふものは物を敎はらなければ何にも判らぬものである、一切の事自分ひとりで覺えるといふ事はない、小用の

仕方一つでもナカカ／＼自分で發明したものではない、何通も／＼着物を汚したり、椽側を濡らしたりしたのを、度々敎へて貰つて漸くひとりりで出来るやうになつたのである。さういふもので一切の事は皆導きに依り敎へられて人らしき行動に就たに違ひない。して見ると師匠の恩といふものが是れ亦大事なのである。小用の仕方くらゐは只で敎へて貰ふにしても、その他學問の上に於て、又修養の上に於て、一切の大事な事柄を敎へて貰つて漸く人間らしき考へ方や行動が出来るのである。

モウ一つは人間はどうしても男女相寄つて夫婦の生活をするものである、又夫婦の生活がなければ家は續かず、國は續かない、人類が續かないことになるから、或る意味から言へば夫婦の結合といふものが非常に大事なものである、みんなが獨身生活をするといふことになれば、五十年ほどで人類は絶滅してしまふのであるから、元も子も無くなつてしまふ。

夫婦の結合生活といふものは人間の自然であり、又合法的のものであるから、どうしてもなくてはならない。佛敎は夫婦の關係を否定したものではない、否定どころではない、夫婦の恩といふことを佛は説かれるのである。唯だ専門に佛敎を宣傳する者が無妻主義を採るとかいふやうなことは、軍人でも本當は無妻の方が良いとか、或は船乗でもして居るやうな人が無妻が良いとか、學校の女教員はマア亭主を持たぬ方が都合が良いといふのと同じで、職業上の都合から出て来た事である、何も學校の先生が亭主を持つて悪いといふ譯ではない、だからそれは別問題である。佛敎は夫婦の關係に就ても、非常にその間をよく敎へたものである、夫婦の關係を恩の觀念で説明したといふことも偉いことである、妻から言へば夫の有難いことを感じて夫の恩を感謝する、夫から言へば妻の恩を感激しなければならぬ、それはいろ／＼の仕事を手助けして行く上に於ても、又子孫

を遣して行く上に於ても、男が一人ではどうしても子供は産めないのであるし、そこに女房の御恩といふものがある。又家庭に於ては女房が居なければ男は淋しくて仕様がなないのである、豪さうな事を言うてもチヨット女房が留守にすれば、「早く歸つて来て呉れ、ば宜いが」……といふ風に、偉大なる慰安を受け、又活動の力がそこに養はれて行くといふことに就ては、夫婦生活の互ひの恩といふものは廣太無邊なものに違ひないのである。それを佛は教へられたので、どんな夫婦でも互ひに恩のあることを知り合せて、妻は夫の恩を感激し、夫は妻の恩を認めて尊敬をして行かなければならぬ。

斯ういふ四恩、六恩といふのが大きな恩であるから、それは忘れることは出来ないのである。殊に師匠の恩といふものは、特に教といふ方を中心にして考へたならば一番重いことになつて行くのである。國の方を中心すれば國王の恩が一番重くなるが、教化

本位の方で言へば即ち師匠が一番重いことになる。それ故に日蓮聖人は報恩鈔を書かれたのである、師匠道善房に對する事が非常に大事であるから、「父母師匠、國の恩を忘るべしや」と、特に師匠の恩のこ

とを茲に標榜されたのである。この師匠の恩が特に重いと云ふことは、身延記の中に詳しく日蓮聖人が書かれて居る。即ち帝釋が狐を拜して師匠としたとか、雪山童子が半偈を聴いために鬼を師匠と仰ぎ遂に鬼の口に身を投じたとかいふやうに、師といふものは設ひ半偈の教を受けても、その恩は命を捨てても報ひなければならぬといふことを徹底的に説かれて、身延池の中にはいろいろの例をズツと挙げられて居る。人間は何處までも師匠の恩を忘れぬやうにしなければならぬ、諸君がこの統一闍で教を聞いても、やはり同じやうな道德觀念を持つことが大事なのである、それが佛法の教になつて居る。發心の因といつて、統一闍の説教な

ら説教を聞いて「あゝ有難い事だナ」と思つたら、その發心信仰を導かれた御恩は忘れてはならない。それが即ち法化といつて、法の中から生れて出るのである、肉體を産んで貰つた親と、精神の自覺を産んで貰つた親といふものは、生涯忘るべきものではない、それが佛の教である。その師匠の恩の事に就て報恩鈔といふものを日蓮聖人は書かれたのである。——(次續)——

佛、諸の比丘に告げたまはく、若し衆生ありて反復することを知らざれば、大恩すら尙ほ憶はず、何況んや小恩をや、設ひ彼れ我に近づくとも、我れ彼に近づかず、正使ひ僧衣を被て吾左右にあるも此人猶ほ遠ざかるが如し。

(増一阿含經)

末法の佛教

會費 拾貳錢

七拾貳錢

壹圓四拾四錢

末法の佛教は大聖人の御魂の叫のそのまゝです。この叫びにお互は覺醒し精進して眞の生の喜と幸福を味ひませう。

- 一、大聖人御遺文を毎月發行するのです。
 - 一、文体は全部かなが付て居ります。
 - 一、難解の文には略註がありませす。
 - 一、毎號聖蹟か聖傳か聖筆の寫眞が入れてあります。
 - 一、實費で御分ちするのです。
- 見本御入用の方は金十錢封入御申込み下さい

東京淺草清嶋町 統一闍圖書部
 東京四谷南寺町法恩寺 御遺文普及部
 東京神田三崎町二ノ二 振興社

天風三萬里紀行 (其一)

三八

文部省囑託 小林 日種

一、京城まで

四月一日

味爽起き出で、佛前に一路平安を祈念した。館山を立つたのが午後三時半、途中千葉に小憩し、而して午後十時五十分發の名古屋行に乗込んだ。本多日生現下より馬はつたる添書を持参して豊田紡織廠の豊田利三郎氏に會ふ、渡瀨の便宜を得むが爲である。四月二日

名古屋に着いたのが朝の八時半であつた。原田日勇師を訪れて所用を辨し、市内を少しく散策した。而して夕景フト思ひ立つて、山内櫻溪先生を池之内なる寓居に御訪ねした。

先生は私の想像より若くもなく老いてもゐなかつた。そのおのすかなる辯舌の妙は私の胸を打たずに

ゐなかつた。その折、先生の私の書帳に御認め下さつた詩は左の通りである。

人間總兄弟 我憾不同行

到處皆天下 有青山太陽

四月三日

原田日勇師御夫妻の心ゆくばかりなるもてなしを受けて早朝快よく出發した。京都に着いたのが八時で有つた。私の朝の通過を憶測せられて、田邊善知先生が拾數道の紹介状を持参せられ、これを車窓より手交せられたるは意外でも有り、且つ御好意の程が肝銘せられて、感涙禁じ得ざるものが有つた。

曇きに山田一英師の長文の書牘と、紹介状を與えて激勵せらるゝ有り、今又、田邊師の御好意を受け日蓮宗に對する感謝の情を覺えた。

四月四日

關釜連絡船 徳壽丸船室のベットで眼を覺ましてはゐたが、まだ夢の續きでも見てゐるやうに、うつらうつらしてゐると、ガラ／＼と鎖を動かす音がして、何か物言ふ人聲が間近にする、氣が付くと、船は靜かに止まつてゐる、あゝ、着いたのだなと何となく安心した氣持で跳ね起きた。荒れる／＼と聞かされてゐた航海も案外樂であつた。

埠頭には天晴地明會の諸氏が會旗を押し立てゝ出迎へに出てゐて下さつた。同夜は同會の會堂で講演した。

四月五日

午後四時半より税關にて、午後八時より府公會堂にて講演をなした。演題は前者が『餘裕と眞劍』後者が『一歩前に出でよ』時間は前者が一時間半、後者が二時間半

四月六日

朝、釜山を發して大邱に着いたのが一時半であつた。此處へ來て始めて朝鮮へ來た氣分がした、誰も言ふ事だが釜山や京城では靜乎たる朝鮮氣分は味はれないのである。

大邱の街には夢幻が有り廢頹が有り、哀愁が有りそして雜踏と混亂と猥雜が有つた。

大邱の街には何處へ行つても年若い處女に見るやうな、濕ぼひと云ふものは無かつた。そしてつまじさも無ければ『笑』もない、又青年男子が持つ活氣も元氣も光明も輕快も憧憬もない、蘇生し難い迄に枯れてゐる。慰し難い迄に老衰しきつてゐる、而してそれは實に朝鮮そのもの、持つ相では無からうか——私は斯う思つて、思はず胸の痛くなるを覺えた。此の夜は、雨の降る中を料亭醉月で催された東洋大學同窓會の歡迎會に臨んだ。

四月七日

朝、府廳の案内で米人經營の癩病々院を參觀した。朝鮮に基督教の隆盛なる實に偶然に非ずと思つた。病院經營と學校經營とは彼等の主力を盡くす所である、顧みて佛教徒は如何、我が立正門下は如何真に悵然たらざるを得ない。

夜、八時より第一小學校講堂に於て開かれた、府主催の講演會に臨んだ、參聽者の三分の二は、日語を解する鮮人學生であつた。北村大成師、開會を宣し

次いで余は、「最近の思想問題と我が國體」と題して約二時間半語り、時刻が來たので演壇より直ちに驛に赴き、北村、海野その他諸氏に見送られて大邸を發し京城に向つた。

四月八日

朝——赤い圓い禿山

土塚の白壁、黒豚

小川、犬、へんぼんたる洗濯物

それ等を點綴して立看板の林——大學眼藥、福助足袋、稻こぎ親玉號、自轉車ソクリヨク號、風邪には新藥ノムトナル散等等が見えたり消えたりしてゐるとそのうちどう／＼京城へ着いた。

驛には安藤君その他が出迎えてゐて呉れた。

午後一時、府廳の自動車で總督府に赴き山梨總督に面會した、想像してゐたやうな、嚴つい武人型の人ではなくて、優しいと云つた感じの文人タイプの人で有るのが嬉しかつた。余の書めに應じて即座に、「春風笑駕福神船」と大書して贈られた。

夜七時半より、光園寺に於ける東洋大學同窓會主催の講演會に臨んだ、兼古秀道君開會を宣し、余は

一步前に出でよ』の題下の約二時間語りつた。閉會之辭は難波專太郎君之を述べた。それより余の歡迎會を聞くとして、村上日磨君の先導にて一同自動車を聯ねて料亭吐月に赴き二時頃迄快談高潮した。

四月九日

安藤乾函君の案内で仁川に赴いた。府内を一巡した後、府尹寺島氏を訪づれ快談した。定刻會場に赴き講演した開會閉會共に府尹自から之を爲し、應接、待遇、紹介等悉く懇篤鄭重を極め、多感の遊子をして温情に泣かしめた。感謝。

四月十日

小閑を得たので單身、開城に赴いた、京城からは汽車で一時間四十分の行程である。開城は誰も知る通り朝鮮人蔘の産地として有名である。驛からタクシーを走らせて人蔘專賣局に到り、刺を通じて參觀の希望有る旨を語り快諾を得て之を縦覽した。

此の草は——無論草である——内地に有る萬兩と云ふ木に酷似してゐる。莖も葉も實も實によく似てゐる。種子を下してから六年目に收穫するのださうだが、それも朝鮮らしい氣の長い話だ。

高麗王宮の址、満月臺等は時間が無いから割愛して薄暮漸やく京城へ歸つた。

午後七時半から約束の放送をすべく放送局に赴いた、何しろ處女放送なので胸が落付かぬ、それでも三十五分キツチリ話した、婦人のアナウンサーに、辯解をする、

『イ、エ大變結構でムいしました』と云ふ。それで安心して結構だつたと思ひ込むのだから良い氣なものである。放送局の需めに従つて放送室で記念の撮影をなし、それから長谷川淨進君の家に招かれて晩く迄御馳走になつた。

四月十一日

久保秀蝶氏が見えられ景福宮と秘苑を案内しようとして云ふので見物に出た。博物館へも動物園へも行つた。博物館では久原房之助氏の寄贈品で、大谷光瑞師が明治三十五年以來、前後三回に亘る探險によつて、甘肅省、新疆省に於て蒐集將來したと云ふ、壁畫、佛像、土偶、古碑、祭器、木伊乃等が珍らしかつた。これは西歐學者をも驚かすに足る貴重な資料で有ると事である。

秘苑はさして云ふ程の事はないと思つた。新宿御苑を觀た眼では、あれとほぼ同巧なものである。

此の日久保氏の招待で支那料理の馳走に預つた。實に美味である、去り乍らどの位食べて満腹になつたのか見當が着かないのが困ると思つた。夜は公會堂に於て府廳主催の講演會が有り、「社會貧なき理想境」の題下に二時間餘語つた。

四月十二日

愈々明日の朝は、朝鮮を去つて滿洲に入ると云ふので、朝來、訪客やら整理やらで多忙を極めた。午後一時より、京城電氣株式會社にて社員一同に對する講演を爲した。夕景難波專太郎君より御招きを受け、且つその近著に係はる朝鮮風土記を賜はつた。

夜は友人六七人が會して送別とて深更迄語り合ひ依頼の揮毫等を爲し終つて、明日の今頃は何處を走り居る事やらなど思ひつゝ寝た時は、二時をとうに過ぎてゐた。

)(((

知法思國會第七回懇談會

先月末の理事會に於て懇談會は可成毎月開催しよう、夫れは吾人の知見を博くすると共に親睦を旨とするのみならず各方面に對する意見の交換等も大事であるからといふことから。そこで六月は特に露國の民情に精通された、曙夢、昇直隆氏を頼はせて十五日午後五時から、有樂町日本俱樂部に於て「最近の露西亞事情に就て」の題下に開講された、當日出席者の氏名を擧れば、

井上道太郎氏 伊東竹三郎氏 石川 隆一氏
井筒 調策氏 磯部 滿事氏 小澤 元重氏代
和賀 義見氏 梶木 顯正氏 田中 道爾氏
高木鑑三郎氏 中村 清一氏 中村 藤吉氏
永井 米藏氏代 松本 有信氏 小西 日喜氏
寺澤 萬三氏 佐藤 卓藏氏 坂本 泰造氏
釋 眞誓氏 鈴木 日雄氏 (いろは順)

本多理事長は京都に開催の教化聯合大會講習會の爲めに御西下、又熱誠なる佐藤及び加藤兩理事は微恙、更に佐藤、岩野、矢野、藤間等或は旅行に或は支障、其他の篤志諸氏も生憎無難事故の爲めに來會を見ざりしは殊に遺憾に覺へた。定刻に至るや、昇直隆氏は登壇、謙讓なる態度で共產露西亞の革命後より最近に及んで、各方面より多様多種の廣漠にして且つ精細な

る彼等の日常生活をば三時間以上に涉つて撰述された。昨年暮、橋本大佐の「ソビエツト露西亞の現状に就て」と相俟つて始めて彼等の眞想が能く現はれる。

其大要は歐露の國情はウイコフ總理とスターリン共產黨主腦との暗闘があつて、民衆的彼等の稱する理想政治も九人の最高幹部に依つて二派の相反した政策に支配されつゝある國民こそ大きな不幸であろう。經濟方面でも其空想が裏切られて歳出の増加一方に伴ひ物價の騰貴又食料の欠乏等極度の悲觀失敗の跋をば數理と實際とを以て指摘し、農工の反叛は結局利權開放や積極政策を餘儀なくせしめ以て資本側に兎を抜いだ有様で其情勢は日々非であり。一轉して社會文化施設は折角の勞働宮殿も活用されず、監獄所や托兒所の繁昌は何を物語つてゐるのか、軟文學が愛讀されるかと思へば妙齡の婦人が斷髪で烏打帽の男装に家庭の情緒は失墜し、親子の思想が天地の相違を示し砂漠の如き無味寂寥に、他面成婚離婚の禽獸に墮落せる實證を耳にして今更暗然たるを覺ゆる點もあり苦笑も禁じ得ない。更に農村の婦生活に於ける抱擁會等の奇習は今や全國的に彌蔓せんとして流石の當局も憂憤しつゝありとが、又宗教が聖教派とレニーン廟の相對峙して双方劣らざる繁昌を見る如き二大潮流は何を示し何を教へてゐるのか、即ち人は遂には何等かに便らねば生きて行かれぬ事の現證であるまいか、共產勞農といふやうな新しうな國も

其實は矢張り古い國家の上に立脚してゐることが明瞭に吾等に告白してゐるものであるといふ結論に終つて降壇された。

勞農國を憧憬せる幾多の男女に熟知せしむべき澤山の事實が物語られた、吾人にも耳新しい點が尠ならずあつた、幸に不日「教」の紙上に掲載するであらう、それは直接に耳から入るとの間接に目から知るとは感激は相違がありとはいへ幾何でも我同胞の期待に添ふと信するのであります。

長講後二三の質疑應答があつたが早くも既に九時半を過ぐる十五分、惜しく散會した。

知法思國會教化大講演會

同會は豫定の如く教化大講演會を六月廿三日午後六時半より本郷區湯島小學校講堂に於て帝國在郷軍人會本郷區分會及び本郷區青年團後援の許に左記の講師に依つて開講さる

一、知 法 思 國 慶大教授 柴 田 一 能 氏
一、國家の現状に鑑みて 海軍大佐 杉 本 幸 雄 氏
一、國民の自刺心 文學士 小 林 一 郎 氏
一、教化の基準 大僧正 本 多 日 生 氏
同夜八時頃より降雨なりしも大講堂滿員大盛況にて十時十五分 陛下萬歳三唱を以て閉會す。

編輯局より

梅雨もあけて暑い盛夏に向ひます、皆様の御健勝を祈ります。此時に本誌は愈法鼓を撃ちて四恩報答の實を挙げたいと存じます。

天下廣しと雖も純正法華經の心髓を發揚し、日蓮聖人の眞意義を光顯し、正信に安住せしむるものはあまり他に多く見受けないうけに本誌の使命の重大さを覺へます。

戦線が益擴大されて参ります、従つて彈藥と兵糧の充實が肝要で、彈藥の方は總裁親下始め各位の玉稿が山積され寧ろ其掲載に遅れ勝ちとなつて相済まぬ次第であります、願て兵站部の兵糧が大に心細く目下漸次急を告げてゐます。

編輯小僧は卒直に眞情を告白致します、此際護法篤信の愛讀諸氏！どうか御手数恐れ入りますが未拂誌料のお方は御精算下さいまして、吾等の活動に自由ならしむるやう幾重にもお願申上ます。

七月以降に御拂込の誌料等は來月號より紙上に明記して感謝致すこととし、特に領收證御入用の記事なき場合には別に受領證を差上げず警手させて頂きたいものです。

御通信は御住所と氏名は共に必要で可成階書等で明瞭に、又誌料は何月より何月に至る幾番分とお認めお願申上ます。御轉居の場合は新舊の兩住所を御報知下さい、本誌の發行所も今回妙國寺内に變更致しました。あなたの親しい父母兄弟として他にも御紹介をお願い申上ます。

野口日主上人世界巡錫

痛快にして亦悲壯なる野口日主上人の世界巡錫、吾等は門下の爲に否日本佛教の爲に同上人の前路平安を惻然としてやまぬ。去る六月十六日夜統一閣に於ける出發紀念大講演會を最後として彌々廿一日午後三時横濱を天洋丸にて、一路ホノルルへと出發された。

當日東京驛の見送人朝野の名士二百餘名、横濱埠頭の見送者七十餘人岩野少將矢野茂閣下を始あ佐々木安五郎安川繁種氏等の顔も見えた、簡單な乾盃を埠頭四號岸壁の待合所に舉げ午後二時半乗船、立正門下青年聯盟の松岡林造君は勇ましくも埠頭に一天四海皆歸妙法の見送旗を打ち振り野口日主上人萬歳を高唱すれば一同之に和して三唱、その内に赤白黄の惜別のテープは盛んに投げられる、松岡君は夢中になつて大旗を振り廻す全く埠頭の見送人は凡て同上人の見送の如くに見えた、船は動き出した野口上

人は紫の居士衣に赤の略五條と云ふ姿で上甲板に直立目禮される萬歳の聲は天に轟く旗は夢中に振られる、船はだん／＼岸を離れる全く劇的シーンであつた、同三時半上人の姿の見えなくなる頃各々三三五五名残惜しくも歸路についた。

因に今回上人の爲に起した餞別會の寄附金は總額金八千〇二十三圓也の巨額に達した吾等は同上人の爲に佛祖の御鴻恩を謝してやまぬと共に各位有志の御芳情を深く茲に感謝申上げて置きます。

南無妙法蓮華經

昭和四年六月廿二日

野口日主上人世界巡錫餞別會

合掌

◆新刊急告

本多日生猥下著

日蓮主義の心髓

四六判三百數十頁
總振假名付
定價金壹圓八拾錢
送料 金十四錢

本書は法華經要義の姉妹篇なり、日蓮主義の教義信條を結束するを以て目的とし、秩序整然として記述せらる、日蓮主義の精髓を領得せんと欲する者の必須缺くべからざる良書なり。日生猥下多年の蘊蓄を傾倒し熱誠を籠めて述作せられし所なれば善知識は全梵行なりの聖語を思ふて一本を購入せらるべし。本書收むる所は發心篇、宗旨篇、信仰篇、道義篇、護法篇、得益篇、及び警策篇の七篇なり、能く日蓮聖人の本旨を傳へて餘す所なし。發行は七月末の豫定、申込期日は七月十五日限、豫約者は定價の二割引、送料共金壹圓五十八錢を以て配本。

東京府品川町妙國寺内

發行所

振替東京一〇九四〇番

東京統一團本部教戰錄

△六月二日(第一日)午後一時半開會、先づ法要を勤修し次で講演會にうつり「世法と法華」と題し約二時間に亘り本多親下の御講演があつた當日聴衆約八十餘名
 △六月九日(第二日)午後一時半開會、最初に法要次で講演會「折伏主義の眞精神」櫻木顯正「經濟難和と日蓮主義」田中道輝「生死觀と文化」磯部嘉事「我が体験の信仰」小西日喜師等の講演あり、來會者七十餘名因に當日は同志一同の出席を得て本月第五の日曜を如何にすべきかに、就て相談會を開き現下の國狀に鑑み大日本主義を高揚する事に決定した。
 △六月十三日(第三日)午後一時半開會、法要後講話「歡喜増進」の題下に會長親下の御講演あり來會者八十餘名、當日晴
 △六月十六日(第四日)午後一時開會、開會之辭櫻木顯正「湯御慈惠の功德」中村商學士「我が國は神國なり」伊東竹三郎「佛佛開教山口智光」中道の教「和實義見師等、來會者八十餘名、因に當日日本多日生親下は京都府の講習會に出席される爲め御西下第四日曜に出席される事と成つた。
 △六月廿三日(第五日)午後一時半開會、法要後講話「法華經の五大要義」の題下に本多親

下の御講話があつた聴衆八十餘名
 向夜六時半より本郷清島小學校にて知法思國會主催の教化講演會開催で本多親下御出演
 △六月三十日(第六日)午後一時半開會「國民主義の復活と日本の使命」福國主幹北冷吉氏「醇厚和會」本多日生親下、時代人心の傾向を鑑みれば全く吾等門下の前途は躊躇して居られない大いに賑はまらなからぬ、吾れは「は何れともあれ大いにやる事だ、これが吾れ」の第一のモットーでなければならぬ。(櫻木記)

名古屋教報

五月三日 藤下町豊田女工講演原田日勇師
 五月五日 開日鈔講義會館にて原田日勇師
 五月八日 婦人會 清水一乘師
 五月十五日 日蓮上人の孝心 原田日勇師
 五月十五日 開日鈔講義會館にて原田日勇師
 五月廿四日 豊田本社豊田鐵機會社 本多大僧正
 五月廿四日 豊田鐵機本社 山内櫻漢氏
 五月廿四日 豐田鐵機本社 山内櫻漢氏
 五月廿五日 專賣局と日本車輛 本多大僧正
 五月廿五日 鐵道女工場 山内櫻漢氏
 五月廿六日 東洋紡績糸井紡織 本多大僧正
 五月廿六日 自慶會大會を開く聴衆八百餘名
 五月廿六日 實に講堂立並の餘地もなく定刻より續々入場定刻午後七時より丹羽理事長に依つて事業の報告次に趣意書を原田日勇師願願尋て右傾と左傾の題下に四王天少將世界の動きと日本

大阪教報

五月八日蓮成寺にて談話會、十九日、二十日兩夜宣傳隊出動、二十一日晝堂開寺にて無上第一の信本多親下、同夜佛教會館にて阿舎と法華本多親下、廿六日武田宅にて首魁の浮木京藤師、顯本法華の主張上田師、廿八日堂園寺にて立教開宗會を修し我祖の立教開宗京藤山主久遠の靈光顯井師、六月八日蓮成寺にて談話會布教發展水也田氏、五種の妙行和井田師、九日刀根山病院にて日蓮聖人の特長京藤師、十二日堂園寺にて晝堂法要を修し正法に遇ふの喜金光師、同夜不滅の祝願上田師人と教金光師、何れも頗る盛會多大の効果を奏せり。

神戸教報

去る五月二十日日本多大僧正親下關西遠征を機會に坂宿立正寺に於て遅れ乍らにも親下天蓋拜禮紀念祝賀會を開催す、來會者約二百名講堂の盛會なり、式の順序、一、着席二、修法三、發起人代表挨拶四、感謝文挨拶五、祝詞六、紀念品呈呈七、親下講話八、万歳三唱九、閉會當日牧忠馬氏發起人を代表し左の祝詞を讀む。

祝詞

恩師大僧正本多日生親下ハ御幼少ニシテ佛門ニ入ラレ爾來五十有餘年其ノ間一意國民教化ノ爲メニ勇猛精進遊バシレテ教ヲ徧ク全土ニ布キ化ヲ萬民ニ施シ給フ。則チ専ラ佛教信仰ノ正統ヲ擁護シ歸メテコレヲ顯發シ以テ一切衆生ノ盲目ヲ開キ人類永遠ノ福根ヲ樹立シ國民ヲシテ實業ノ一善ニ安住セシメントシテ諸ノ因縁譬論言辭ヲ以テ縱説横説實ニ懇切ヲ極メ給フコト宛モ慈母ノ愛子ニ乳ヲ含マシムルガ如シ一度親下ノ御法蓮ニ列スル善男女ハ思想情操ニ於テ速ヤカニ根柢ヨリ一變シ正義ノ信仰ヲ獲得ス。コレ徧ニ親下ノ法ヲ思ヒ國民ヲ愛シ給フ赤誠ノ致ス所ニシテ

我等感激シテ止マザル所ナリ。實ニ正法正師ニハ値ヒ難シ我等コノ難値ノ正法正師ニ値ヒ奉ルコトヲ得タリ一眼ノ龍ノ浮木ニ値ヘルガ如シ親下ノ至誠ハ途ニ天聽ニ達シ畏クモ、今上陛下ノ大禮ヲ舉行セラル、ニ當リ積年ノ御功績ノ顯著ニシテ大ナルヲ嘉賞セラル、ノ思召ヲ以テ天蓋ヲ賜リタリ。永年親下ノ慈訓ノ下ニ庇護セラル、我等ノ法悦歡喜何物カ之ニ過ギン愈々親下ノ慈訓ヲ奉戴シ以テ異休同心聖旨ニ應ヘ奉ラシコトヲ誓願ス。茲ニ我等一同相謀リ今日ノ御慶事ヲ御祝ヒ申シ上グルト共ニ御恩徳ニ對シテ深ク感謝ノ微意ヲ表アラセ給ヘ。謹而天蓋拜領ヲ祝賀シ奉リ併セテ報恩謝徳ノ微意ヲ表ス

昭和四年五月二十日
 ◎五月二十七日午後七時より 修法後遺文講義 熊井師
 ◎六月二日午後一時より 日ノ本子供會開催 狐にだまされた武士 日暮光道先生
 ◎六月二日午後一時より 日ノ本子供會開催 狐にだまされた武士 日暮光道先生
 ◎六月十二日午後一時より 修法後 遺文講義 熊井本光師

中國教報

◎六月十六日午後七時半より 立正寺にて日蓮主義大講演會開催 本多日生親下 信力堅固
 ◎六月十六日を以て縣立高女内に閉講せる法華經研究會も第一期研究を終り来る、九月より第二期研究を開始する由
 五月三日 周區青年團一夜講習會にて 生存の全きを欲せば 中山賢勇師
 同 九日 佐伯木村婦人會講話公開堂にて 靜より動え動より靜え 中山賢勇師
 同 十一日 月經例會長田宅にて 佛と共に働く心 中山賢勇師
 同 十二日 安光宅にて法要後講話 榮憤に順なるもの 中山賢勇師
 同 十三日 輪原宅にて法要後 欲するまゝに與えらるもの 中山賢勇師
 同 十五日 久成寺婦人會 人の子多けれど人となるは少し 中山賢勇師
 同 十六日 久成寺にて青年會 聖都遠からず 中山賢勇師
 同 廿四日 稻崎女子青年團員のため 聖水を洗すは清水の力なり 中山賢勇師
 己上

千葉教信

- 三月二十四日 中野本城寺 信仰の要義 高貫賢龍師
- 四月一日 中野本城寺婦人會 信心のすゝめ 高貫賢龍師
- 四月十九日 同本城寺 内に醒めよ 高貫賢龍師
- 五月八日 和泉東光寺 反會より懺悔へ 草功信榮師
- 五月十九日 中野本城寺 法華經の二大思想 高貫賢龍師

金澤教信

- 春季法要 立正寺に於て五月一日 眞修兒玉 布教師の講話があつた
- 明淨女子青年會 立正園に於て五月五日開く、女子は何處に行く 能仁一十師
- 四高講座 崇信會に於て五月五日開演 佛教信仰の歸結 能仁一十師
- 常樂會 本覺寺に於て五月十五日開く 婆娑即寂光論 本郷常次郎氏
- 獅子王青年會 立正園に於て五月十六日開會を開く 富元會榮師
- 現代を凝視して 能仁一十師

- 精神講話 縣下森本村に於て五月二十日開く 人生の要諦 能仁一十師
- 日蓮主義大講演會 立正園に於て五月二十二日開く 所謂新思想に就て 佐藤海軍中將
- 春季法要 本長寺に於て二十三日開く 信心決定 能仁一十師
- 家庭講話 蛤坂町井村氏宅にて五月二十三日開く 一人の力 能仁一十師
- 天晴會 本長寺に於て五月二十六日開會を開く 人生を凝視して 能仁一十師
- 開山會 本行寺に於て五月二十八日開會を開く 日海上人は布教政策 能仁一十師
- 家庭講話 河合氏宅にて五月二十九日開く 要が中の要 能仁一十師

x	x	x	x
x	x	x	x
x	x	x	x
x	x	x	x



社寺建築及臺灣檜材の安價提供

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候
 追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不
 充分なる檜材は干割狂ひ等の缺陷多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地
明治神宮外苑内日本青年館正門前

社寺工務所

(電話青山六〇二八番)

神奈川縣鶴見町

社寺工務所鶴見支所

福岡市外堅箱町馬出松原

社寺工務所福岡支所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社寺工務所大阪支所

(電話西三三二四番)

- 臺灣檜材
 一、耐久防腐
 二、蟻害絶無
 三、香氣清楚
 四、木質堅緻
 五、理髮整木
 六、木高雅包
 大六
 特微

價定一統		一統	
一冊	半冊	一冊	半冊
金貳拾錢	金壹圓貳拾錢	金貳圓貳拾錢	金壹圓貳拾錢
送料五厘	送料共	送料共	送料共
前金	前金	前金	前金

一統廣告料		一統	
一頁	半頁	一頁	半頁
金貳拾錢	金拾錢	金貳拾錢	金拾錢
金拾錢	金五錢	金拾錢	金五錢
金五錢	金二錢	金五錢	金二錢
金二錢	金一錢	金五錢	金一錢

昭和四年六月廿四日印刷納本
 昭和四年七月一日發行
 (第四百十二號)

不許複製

編輯兼發行人 磯部滿雄
 印刷所 東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地
 電話高輪六〇二四番

發行所 統一發行所
 編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ
 東京編發五一〇七一番

